

能が描く働く女〜『海人』と性別越境

同志社大学社会学部教授 佐伯 順子

世阿弥は能の芸を、女体、男体、軍体、老体と分類した。一見して、能の芸には男女の性別（社会的、文化的な性別、ジェンダー）が重要であり、演技の基本をなしているかに見える。だが、シテの性別が女と男の境界を越境する曲目、現代の用語でいえばトランス・ジェンダー（性別の越境）の要素が濃い演目もある。『海人』がまさにそれである。

金剛流一番本の「謡い方概説」は、「前場では主として母性愛を扱っている」と書き起こしつつ、「海人の亡霊が、女人成仏して龍女と変じ、早舞を舞うのがこの曲の主題」と解説する。観世流一番本の「曲趣」もまず、「女人成仏といふことを主題とする」と明言し、「普通ならば六道に輪回すべき女の身が成仏の一段階なる龍女となるといふことは、法華経の功徳に由るものでなければならぬ」（原文旧字体と、女性であるにもかかわらず主人公が成仏するという展開が、この曲の特徴であり、見どころであると強調されている）。

だが、果たしてそうだろうか。主人公が女性であることは、この曲でそれほど重要なのか。私はむしろ逆であると考ええる。「前シテは男女の差別も見えぬ海人と言われ、最初の一セイ、サシ以下強吟調で、シツカリと謡い進めるのが、女性のシテとしては甚だ異色である」（謡い方概説）と、シテが、男性的である（より適切には、性差を超越している）ことに注目している金剛流一番本の解説は、その意味で、この曲の本質を見事にとらえている。

舞台にまず姿を現す前シテは、ワキの従臣の目から、「男女の差別は知らず一人一人来り候」と描かれている。近代化以前の社会においては、服装や化粧といった外見や、社会的な立場において、女と男という性別の差異よりも階級の差のほうがはるかに大きかったといわれる。都の貴族社会においては、女性と男性の服飾は明確に分かれ、その社会的な役割にも、男性は公的な空間、女性は主として私的な空間に生きるという大きな違いがあった。だが、地域社会においては、女と男はともに労働者であり、生活を支えることが常識であった。女性であるからといって、はなやかに化粧し、美しい衣装に身を包んでじつとしているわけにはいかない。多くの女性たちは農作業や漁業関連の労働に従事していたのであり、身なりにかまう時間的、経済的余裕もなく、まさに髪をふりみだして、働く状況であった。

ましてや海人といえればかなりの肉體労働であるから、たくましい体格をしていたはずであり、都の人間を見慣れた人物にとつて、外見で男女の区別がつきにくかったのも無理はない。現在の前シテの扮装からは想像しにくいけれども、近代化以前の地域社会の働く女性である『海人』のシテは、『葵上』の六条御息所と同じ意味で、女性的^レではありえないことを認識しておく必要がある。同じ働く女性でも、身を飾ることが職掌のひとつであった『江口』や『班女』の遊女シテとも異なる。

家の外での労働は、貴族社会の視点、あるいは近代以降のジエンダー役割からは、**「男性的」**とみなされることが多いので、労働者である『海人』のシテは、その意味ではそもそも**「男性的」**といえる。だとすれば、後シテが男体の龍王となる「変成男子」の小書も、女性であるはずのシテが男性に変身したのではなく、もともとシテに内在していたジェンダーを顕在化しただけと見ることができ、シテの本質をよくとらえた演出といえる。より正確にいえば、海人のシテは**「男性的」**というよりも、今日私たちが考える女、男といった区別を最初から超越しており、そこにこそ、この曲の独自性がある。

昨年五月、法然上人八百年忌のシンポジウム「男と女・遙かなる共生関係」で一緒にさせていただいた、浄土宗のご住職で東海学園大学学長の袖山榮真先生は、ご自身に縁のあったある女性から、亡くなられる前に、「あなたは前世で私の母親だった」と言われて驚かれたという逸話を披露された。証明はできない（！）ものの、男性の前世が女性でもありえるということである。ご住職は、釈迦の一番弟子である舍利弗が天女によって突然女性にされ、うるたえていると、日ごろから女、男ということに執着しすぎているのがいけないと天女に諭されたという、維摩経の一節も紹介され、「女は仏にはなれない」とは説かれていない」とおっしゃった。女、男という区別が社会的、歴史的に構築されたものであるということは、すでに多くの人が論じているけれども、『海人』のシテの生きざまを見ていると、確かに、そうした区別が恣意的なものにすぎないと納得される。

仮に、たくましさや力強さを**「男性的」**とみなすとすれば、

海人と深い仲になった淡海公よりも、海人のほうがはるかに**「男性的」**である。貴族の男に肉體労働はできない。妹が失った明珠を探して志度の浦まで来てはみたものの、自分で海にもぐることもできず、現地の女の助けを求めたのだ。人の力を借りなければ目的を達成できない淡海公よりも、海人のほうが精神的にも肉體的にもしっかりしており、**「たくましさ」**＝**「男性的」**という基準自体が意味をなさないとを物語る。

『海人』で際立っているのは、女性と男性の差というよりは、さきに述べたように、近代以前の社会における階級の差である。あえて厳しい表現をすれば、『海人』のシテは、身分は高いが無力な男に利用された**「現地妻」**なのであって、そうした権力関係も正確にふまえた上で鑑賞しなければ、真の感動は生まれない。男性をしのご能力をもちながらも、都の貴族にはなれない地域社会の女性は、息子を通して階級上昇を実現するしかなかった。だからこそ、彼女にとつて、珠をとるために命を懸けることは、ある意味、**「なんでもないこと」**だったのである。

それは同時に、海人として培ってきた卓越した潜水能力の総決算としても、賭けるに値する大仕事であった。使命のために命を投げ出す主人公——これは、映画や漫画といった現代のメディアにおいても、多くの場合は男のヒーローの属性であるが、『海人』ではヒロインのものである。命を懸けてやりがいのある仕事を果たそうとする情熱には、女も男もない。そんなシテを演じるのが男である**「能」という芸能自体も、性別越境を特徴としているのである。**